

日本のシェイクスピア映画について

佐々木 隆

プロローグ

日本のシェイクスピア映画は黒澤（一九二〇～一九九八）の『蜘蛛巣城』（一九五七）、『悪い奴ほどよく眠る』（一九六〇）、『乱』（一九八五）を代表として、製作され、海外からも注目を浴びた。特に一九九一年の国際シェイクスピア学会東京大会を境にして、日本人も日本人製作のシェイクスピア映画にようやく注目するようになり、現在に至っている。ここでは比較的新しい映画に着目していきたい。（二）

一 シェイクスピア映画

シェイクスピア作品の映画化についてロジャ

舟川一彦監修『書齋の外のシェイクスピア』(二

〇一七)には石塚倫子「シェイクスピア映画」が収録されているが、日本人製作のシェイクスピア映画については全く取り上げられていない。「日本の」の冠を付けた場合には上演においては、蜷川幸雄演出によるシェイクスピアが国内外でよく取り上げられることと比べると、日本のシェイクスピア映画はあまりにもその扱いは低い。取り上げられてとしても黒澤明監督『蜘蛛巣城』(一九五七)と『乱』(一九八五)がほとんどである。かつてのシェイクスピア映画研究では比較文化という観点から黒澤シェイクスピア映画が取り上げられたが、その主流は外国研究者であった。しかし、一九九一年の第五回国際シェイクスピア学会東京大会を境にして、日本人も徐々に黒澤シェイクスピア映画を取り上げるようになった。海外で認められてようやく日本でも研究者が取り上げる

ようになったのが実情である。

はつきりとシェイクスピア映画として『ハムレット』の翻案映画化した加藤泰監督『炎の城』(一九六〇)については国内外の研究ほとんど取り上げられることはない。また、シェイクスピア映画として銘打っていないが、荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』(一九五〇)も『じゃじゃ馬騮らし』の枠組みを中心に『間違いの喜劇』

の双子の入れ違いを利用したプロットをうまく活用した翻案映画となっているが、これについても研究は全く進んでいない。

日本人がシェイクスピア映画を製作する場合、黒澤明がそうであったように原作を翻案映画化することによって真価が発揮できるかもしれない。異文化であるものを受容すると同時に、日本流にアレンジ、変容させ、新しい映画作品として発信することは、かつての加工貿易で培ってきたモノ

文化理解をした上で「日本ならどうなるか」「日本人にならどうするのか」といった新たな視点が加わっている。今後も日本のシェイクスピア映画の動向について注目していきたい。

注

(一) これまでの日本人製作のシェイクスピア映画については佐々木隆『日本の沙翁劇・英国のシェイクスピア劇―受容を通して見る日本文化』(武蔵野学院大学佐々木隆研究室、二〇一六年七月)で概観した。

(二) Roger Manvell. *Theater and Film*. (London: Associated University Press, 1979), pp.36-37.